

報告

工芸教育の現状把握と課題に対する対策について

Current Issues in Craft Education: Understanding the Present and Planning for the Future

齋藤愛*

Ai SAITO

Keywords: Crafts, Education, Homespun

工芸, 教育, ホームスパン

1. はじめに

現在岩手県では、経済産業省による伝統的工芸品の指定を受けた南部鉄器、岩谷堂箆筒、浄法寺塗、秀衡塗の4つがある。一方、指定項目に該当しない伝統工芸品は、教育現場での取り組みやイベントの実施、後継者育成など様々な活動を精力的に行っており認知度が高まっているがまだ発展の途上にある¹⁾。本報告は、伝統工芸品及び伝統的工芸品（以下、両者併せて工芸品と記す）の教育的な取り組みの充実を図るため、岩手県及び全国で行われている取り組みについて調査したものである。実際の高等学校で行われている工芸教育の実例や、今後さらに発展することが予測される ICT 教育を見据えて、現在の視聴覚資料について美術館や図書館等の状況をまとめ、教材開発における課題の検討を行う。

2. 工芸教育の現状

教育機関における工芸教育の現状を把握するため、ここでは高等学校芸術科の「工芸」という科目について、先行研究や学習指導要領を引用し概観する。

高等学校の芸術科は音楽・美術・書道・工芸からなり、生徒は科目を選択し授業を受ける。しかし、実際に工芸の授業を開講している学校は全国的に少ない。工芸の教科書を唯一発行している日本文教出版株式会社の教科書採択のデータを見ると、2015年現在で「工芸Ⅰ」²⁾の教科書を採択している学校は391校、「工芸Ⅱ」³⁾の教科書を採択している学校は187校（全国の高等学校の総数が4,936校）と少数である⁴⁾。

工芸の領域は広く、陶芸、木工、金工、漆、染織などが含まれており扱う素材や技術も様々であるため、工芸の教員免許を持っていても全てに習熟しているとは限らない。そのため、実技形式で扱うことの出来る教材の幅は狭まることが想定される。また、工芸科の擁する学校では各分野の専門の指導者が配され本格的な授業を行うことができるが、普通高校では美術教員が1名である場合がほとんどであり、工芸教員の不足が課題として挙げられる⁵⁾。

近年、従来の表現領域主流の授業形態から鑑賞領域にも力を入れることが求められるようになってきた⁶⁾。平成30年7月に告示された高等学校学習指導要領に記載されている「工芸

Ⅰ」の目標には「工芸の幅広い創造活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、美的体験を重ね、生活や社会の中の工芸や工芸の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力を育成することを目指す」とある。「工芸の幅広い創造活動を通して」とは、「表現の各分野と鑑賞の活動を幅広く扱い、単に様々ことを数多く体験するだけではなく、様々な視点から豊かな創造活動ができるようにする」との解説が付記されている。また、「自己の生活や、社会を造形的な視点から見つめられるような活動を展開するとともに、学校を取り巻く生活環境、美術館や博物館、制作の現場など、活動の場を幅広く求めること」も示唆している。「工芸や工芸の伝統と文化によって育まれる豊かな創造性」については、「共生やコミュニケーションをキーワードとするこれからの社会の基盤の一つとなるもの」に位置付けられており、これは地域教育として重要な要素であることを示していると考えられる。

工芸の授業における「鑑賞教育」は、普段目に触れることができないものを実際に見たり触れたりすることが大切であるという考えに基づいた教育方針である。しかし困難な場合は、視聴覚資料により作り手の様子や技芸を鑑賞することも重要な意味を持つ。また昨今の SNS の流行や動画が主流となった現代において、若い世代に工芸品に興味や親しみを感じてもらうには視聴覚教材の工夫が必要であると考えられる。そして実際に見て触れる機会は美術館や博物館あるいは伝統工芸に携わる人々との連携を強めて補完していく必要がある。

3. 岩手県の伝統工芸「ホームスパン」の教育事例

ホームスパンとは、羊毛を手紡ぎ手織りした毛織物のことである。大正中期に政府が農村の副業として羊の飼育を奨励したことにより全国に普及したが、戦時下に羊毛が軍需統制品となったことや経済の高度成長期に羊の飼育農家が減少したこと、繊維産業の機械化などを背景に全国のホームスパンは衰退、消滅した。しかし、岩手県では先人のたゆめめ努力と研究により今日では地場産業に発展し⁷⁾、伝統的工芸品の指定を目指す産地にまで成長した⁸⁾。岩手県内でホームスパンを教材として扱っている盛岡市の私立盛岡スコール高等学校では、1933年創立後、1950年代に詩人で彫刻家の高村光太郎氏との交流が生

*生活科学科生活デザイン専攻

まれ、氏の薦めによりホームスパン（機織り）の授業を行っている⁸⁾。ここでは、2013年4月から2021年3月まで筆者が担当した芸術科の工芸の授業および課外活動の一部を紹介する。なお、当該授業は選択制の授業で、50分を2コマ続きで実施し（2コマで1回の授業とする）、多い年は20人から25人が受講しており、実習助手が1名付いていた。

初回の授業ではホームスパンの一連の製作工程や岩手県に工芸品として根付いた歴史的な背景を説明した後、約30分のNHKで取材した番組を視聴する。次に、刈り取られたばかりの「汚毛（原毛ともいう）」を洗う作業を行う（図1）。作業の前に、既に洗浄済みの羊毛と糞尿で汚れた汚毛を示し、羊の生態について資料を見ながら育ってきた環境を想像させる。その後、タライにお湯を張り、羊毛用の洗剤（モノゲン）を加え優しくつまみ洗う（一人20gから30gを割り当て洗う）。刺激が強いとフェルト化してしまうので、優しく扱う。その後モノゲンを落とすためすすぎ洗いと脱水を2、3回繰り返して乾燥させる。一週間後、洗った羊毛を配布し、「毛ほぐし」を行う（図2）。羊毛は熱を加え刺激を与えることによって繊維と繊維が絡み合いフェルト化するため、汚毛洗いによって固まってしまった毛をほぐす作業を行う。ここまでで概ね3回分の授業を要する。その後、「ハンドカーダー」という繊維の方向を整える道具を用いて、ロール状（籐ともいう）にする（図3）。ロールは糸を紡ぐための前段階で、その後スピンドルという駒状の道具や紡毛機で手紡ぎする（図4、5）。その後紡いだ糸は玉葱の皮やヨモギなど植物染料で染色し（図6）、織物や小物の製作に使用する（図7、8）。製作には10回分の時間を用い、作品の完成まで全行程で概ね60時間を要した。なお、製作物は学校の作品展示会で展示し、課外活動の一環により地域で開催されていた手作り市に出品するなどした（図9、10）。

これらの実践から、受講前にホームスパンに触れたことがある生徒あるいは興味関心を持っている生徒と、全く触れたことのない生徒では理解度に大きく違いがあることを実感した。教室内の体験だけではなく工房や職人などと連携を強めることが課題として挙げられる。また、同校のように機織りに関する道具や設備が充実していない学校や専門分野の異なる教員も、ホームスパンを教材として扱う方法について考察することも今後の課題である。



図1. 汚毛洗い



図2. 毛ほぐし



図3. ハンドカーダー



図4. スピンドルによる糸紡ぎ



図5. 紡毛機による糸紡ぎ



図 6. 植物染料（玉葱の皮）で染色



図 9. 手作り市出品の様子



図 7. 生徒の作品 織物



図 10. 手作り市での生徒による機織り実演



図 8. 生徒の作品 羊の置物

4. 視聴覚教材に関する岩手県及び全国の取り組み

岩手県及び全国の工芸品を取材・紹介する視聴覚資料の現状を、主にインターネットによる検索と関係機関への電話による聞き取りにて調査した。

（事例1）伝統的工芸品と Youtube の連携

経済産業省により指定を受けた伝統的工芸品（2021年1月15日時点で236品目）の動画を一般社団法人伝統的工芸品産業振興協会が企画・製作し、YouTubeと連携して公開している（2022年1月7日時点で64件が確認された）。工房や職人の様子、製作工程の一部を紹介したもので、約5分にまとめられている。茨城県の結城紬を例に見ると、撮影には本場結城紬織物協同組合など3つの団体が協力しており、伝統工芸士5名による実演が記録されている。なお、岩手県が指定を受けている4点（南部鉄器、浄法寺塗、秀衡塗、岩谷堂箆筒）は現時点で製作されていない。

（事例2）岩手県の取り組み

岩手県は、2019年に伝統工芸産業における後継者育成に向け、小・中・高校など教育機関を対象としたパンフレットを製作している。「いわての伝統工芸紹介パンフレット」と題し、イラストや写真が多い年少向けの簡易なものと同様の紹介や実際の製作工程、職人の一日のスケジュールなど具体的な情報が記載されたものがある。岩手県のホームページ上で公開され、無条件にダウンロードできる。また同ホームページでは、工芸

品の見学・製作体験が可能な施設や、南部鉄器などの県産品をそれぞれ約3分の動画で紹介している外部リンクを記載している。なお、パンフレットには、伝統的工芸品を除いて全20件の伝統工芸品が紹介されているが、例えば岩手県雫石町の亀甲織りや八幡平市の地熱染めは記載がないことから、選定の基準は不明であるが全てを網羅しているとは言えない¹⁰⁾。

(事例3) 岩手県立美術館の「映像プログラム」

世界の美術館紹介、ドキュメンタリー映像、岩手県立美術館制作番組など閲覧することができる。閲覧席は4座席・3ブース設置され、放映時間各5分から30分程度の映像番組が135点ある。この内、一般に公開されている岩手県の工芸品を中心とした視聴覚資料は無いことが確認された。なお通常すべての映像は外部から閲覧することは不可能で、貸し出しも行っていない¹¹⁾。

(事例4) 岩手県立博物館の「デジタルアーカイブ」

映像資料が4件あるが、その内3件は伝統芸能に関するもので、残り1件が「イラクサ織」を紹介するものである。これは岩手県のホームスパン産業の礎を築いた及川全三の愛弟子である福田ハレ氏による実演が記録されているもので、材料採取から機織りまでの工程が残されている。1966年から9年間かけて撮影されており、約1時間の映像である¹²⁾。

(事例5) 岩手県内の図書館所蔵における視聴覚資料

岩手県立図書館は工芸品の映像資料が23件あったが、岩手県の工芸品に関する映像資料は無かった¹³⁾。盛岡市立図書館・都南図書館・渋民図書館は該当するものは無かった¹⁴⁾。北上市立図書館・花巻市立図書館では、2件該当するものがあった。一つは1997年に製作された「花巻地方の手工芸」という20分の映像で、花巻市の提灯、大迫町の木彫刻、石鳥谷町の藍染、東和町のホームスパンの製作過程を取材したものである。もう一つは前者と同様に20分の「北上地方の手工芸」という映像で、北上市の鬼面づくりとドライほおずき、湯田町の伝統こけし、沢内村のかんじきを取材したものである。どちらも北上市・花巻市図書館に所蔵されている¹⁵⁾¹⁶⁾。一関図書館では南部鉄器に関する映像資料が1件あった。「この素晴らしき人」という題で一関有線テレビ(現一関ケーブルネットワーク)が制作した。内容は職人と聞き手が対談する番組で、61分の映像である。東山図書館でも南部鉄器の映像資料が1件あった。「岩手の伝統工芸南部鉄器」というもので20分の映像である¹⁷⁾。

(事例6) 県外の取り組み①福島県大沼郡昭和村

室町時代から続くからむしの産地である。からむし(イラクサ科の多年草で、苧麻とも言う)を糸に加工する前の「原麻」の生産を行っており、焼き畑や手での刈り取り作業等、伝統的な工程を守り手作業によって行っている。原麻は重要無形文化財の越後上布・小千谷縮布の原料に使われていたが、昭和40年代以降、原材料の販売だけではなく、製品加工までを一貫して村内で行い昭和村の布そのものを「奥会津昭和からむし織」として売り出した。2017年には伝統的工芸品に指定された。

また1994年から体験制度を実施しており、内容は村に1年間住み込み、からむし織の一連の工程と山村生活を通じて昭和村の生活文化を知ることが目的としている¹⁸⁾。2019年にはこれらの取り組みや村の風習を撮影したドキュメンタリー映画「からむしのこえ」が発表された¹⁹⁾。この映画は公開されて以来全国各地で上映されているが、国立歴史民俗博物館ではこのDVDを研究・教育機関、研究者を対象として貸出を行っており、来館者向けには視聴サービスを行っている²⁰⁾。

(事例7) 県外の取り組み②山形県の最上紅花

日本に室町時代末期に中近東からシルクロードを経て伝来した紅花は、現在山形県の特産品となっている。2021年「紅花の守人」というドキュメンタリー映画が公開された。この映画は4年の年月をかけて栽培から染色までを撮影し、現代において紅花の伝統を守る人々の様子が記録されている。2021年12月に公開されて以来全国で放映されている²¹⁾。

(事例8) 県外の取り組み③東京国立博物館の取り組み
東京国立博物館には数多くの染織品のコレクションが所蔵されている。その内、重要無形文化財「振袖白縮緬地梅樹衝立鷹模様」をモデルに、友禅染めの製作工程を再現し紹介している。これは、2021年11月に教育普及室により制作された約7分半の動画で、東京国立博物館のYoutubeチャンネルで公開されている²²⁾。

5. まとめ

戦争終結から77年経過した今日、戦後の復興を支えた職人は現場から消えつつあり、後継者不足は加速している。そのため国は伝統的工芸品の指定を迅速に進め手仕事の保存に力を入れてきた。しかし指定の要件に該当しない工芸品は県からの支援に差があり、昨今の大量消費、情報の多様化、高齢化の社会の渦中で、あるいは頻発する大規模な自然災害に見舞われるなどして淘汰されることは想像に難くない。今後は地域の工芸品に注意深く目を向け詳細に記録することが喫緊の課題である。

本報告では工芸教育の現状として、工芸科の教員不足や視聴覚資料開発の必要性が明らかとなった。さらに、工芸教育は地域と密接に関わっており、現在、社会の注目が集まる「地域教育」や「地域再生」に資する重要な要素であることも分かった。私たちの暮らしや地域を形成してきた身近な工芸品の存在は、地域で暮らす人々の「生きる力」となる。2011年3月に発生した東日本大震災以後、被災地では鹿踊りや神楽を始め数多くの民俗芸能が演じられ地域住民の心の拠り所となった。被災した沿岸部の民俗芸能に関わる人々は、無形民俗文化財や伝統文化であるとの理由だけではなく、自分たちがそこにいるために欠かせないアイテムとして民俗芸能をとらえているのだそう²³⁾。地域の工芸品も、民俗芸能による地域再生から学び、工芸技術の記録や保護を徹底し、早急に視聴覚資料による情報化や教育教材の開発を進めるべきである。

今後は視聴覚資料による教材開発の計画を進めるため、教員や学芸員などの教育機関関係者や学生、あるいは工房や工芸品に関わる職人にアンケート調査を実施しその教育的効果と課題について考察する。また、「奥会津昭和からむし織」のように、工芸教育に尽力している全国各地の事例を引き続き調査し、岩手県の工芸教育の参考と成り得るものを精査する。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご指導・ご支援頂きました、盛岡スコール高等学校様、盛岡短期大学部生活科学科の佐藤恭子先生に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 盛岡経済新聞『盛岡で「ホームスパンの祭典」3回目開催へ ホームスパンの長い歴史に触れて』：
<https://morioka.keizai.biz/headline/3417/> (2022年1月12日アクセス)
- 2) 「工芸Ⅰ」は、高等学校において工芸を履修する生徒のために設けている最初の科目である。
- 3) 「工芸Ⅱ」は、「工芸Ⅰ」を履修した生徒が、更に次の段階として履修するために設けている科目である。
- 4) 市川寛也『地域との連携による芸術科工芸の教科としての独自性—全国質問紙調査の分析を通して』大学美術教育学会「美術教育学研究」第49号 pp.49-56 (2017)
- 5) 桑村佐和子、横江昌人『「工芸教育法」における授業改善の可能性』金沢美術工芸大学紀要 No.62 (2018)
- 6) 菊池直子『シリーズ「地域繊維産業」12.岩手県のホームスパン』繊維製品消費科学会 55 巻 8 号 pp.604-607 (2014)
- 7) 岩手日報『「ホームスパンを後押し」国の伝統的工芸品指定へ県が支援方針』：<https://www.iwate-np.co.jp/article/2021/2/6/91665> (2022年1月12日アクセス)
- 8) 盛岡スコール高等学校：
<https://www.schole.jp/highschool/history/> (2022年1月12日アクセス)
- 9) 経済産業省：
https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyo-densan/index.html (2022年1月12日アクセス)
- 10) 岩手県：
<https://www.pref.iwate.jp/sangyoukoyou/sangyoushinkou/chiiki/dentoukougei/1008996.html> (2022年1月12日アクセス)
- 11) 岩手県立美術館：

[https://www.ima.or.jp/education-](https://www.ima.or.jp/education-dissemination/visualprogram/)

[dissemination/visualprogram/](https://www.ima.or.jp/education-dissemination/visualprogram/) (2022年1月12日アクセス)

- 12) 岩手県立博物館：<http://jmapps.ne.jp/iwtkhk/> (2022年1月12日アクセス)
- 13) 岩手県立図書館：<https://www.library.pref.iwate.jp/> (2022年1月12日アクセス)
- 14) 盛岡市立図書館・都南図書館・洪民図書館：
<https://ilisod001.apsel.jp/morioka-city-library/wopc/pc/pages/TopPage.jsp> (2022年1月12日アクセス)
- 15) 北上市立図書館：<https://www.library-kitakami.jp/> (2022年1月12日アクセス)
- 16) 花巻市立図書館：<https://ilisod005.apsel.jp/hanamaki-city-librar/> (2022年1月12日アクセス)
- 17) 一関市立図書館：
<https://ilisod006.apsel.jp/ichinoseki-library/searching> (2022年1月12日アクセス)
- 18) 株式会社 奥会津昭和村振興公社：
<https://www.karamushi.co.jp/> (2022年1月12日アクセス)
- 19) 映画「からむしのこえ」公式サイト：
<https://karamushinokoe.info/> (2022年1月12日アクセス)
- 20) 国立歴史民俗博物館：
https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/material/lending_dvd.html (2022年1月12日アクセス)
- 21) 映画『紅花の守人』製作委員会：<https://benibana-nomoribito.amebaownd.com/> (2022年1月12日アクセス)
- 22) 東京国立博物館『友禪染ができるまで』：
<https://www.youtube.com/channel/UCi4kijTbqPOh1LPN2f0eQYg> (2022年1月12日アクセス)
- 23) 橋本裕之『震災と芸能 地域再生の原動力』追手門学院大学出版会 (2015)